

養蠶物語

原田織文庫

文庫4

702



文庫4
702

第五百拾九号

一册



昭和三十年十月二十九日
第一商学部より給付

原田織羅文庫

養蚕物語



Handwritten text in cursive style, likely the beginning of the story 'Silk Rearing Tale'. The text is written vertically from right to left. It starts with '昔の春' (Spring of the past) and describes the process of silk rearing, mentioning '桑の葉' (mulberry leaves), '蚕' (silkworms), and '繭' (silkworm cocoons). The text is somewhat faded and difficult to read in detail.





養蚕物語

早稲田大学
図書館蔵書

佐々間氏
文庫印

世の養蚕物語の書と人小教之とを書すは
わし我年外身は養蚕の業に心を盡し
なすもことごとく補て得る所の取扱ひ
い地におおしにたつては細心して年外
試み学ひ得る事と家小供とを家内の
よの女畜ししを多しに請り聞せんと
一朝一夕とわたり請りぬるをわたり



かたの事とていふも國々の平座ふとてはたか
わとも繼ひていふも老年所^{やま}ま方の業に
しと意とあつしと名菴の常とて得るまに
ありしとていふ信^{しん}けい小冊小菴種の友扱ひ
より幅と得るの解^{あは}く^たの事とて要^{えい}とて書^か載^せ
家^けと油^{あぶら}とていふもの出^いく^くとて我^{われ}國^{くに}から^くる^るの
とていふわつしと春^{はる}沼^{ぬま}の澤^{さわ}田^た徳^{とく}實^{じつ}院^{いん}の世^よ若^{わか}く^く初^{はつ}に
て名菴の業一通^{いっとう}とていふ得^とる^るとて信^{しん}達^{だつ}
信^{しん}文^{ぶん}郡^{ぐん}入^いは野^の村^{むら}徳^{とく}實^{じつ}院^{いん}の世^よ若^{わか}く^く初^{はつ}に

名菴信^{しん}書^{しょ}とて熟^{じゆく}読^{よみ}しとて地^ちとて相^あ想^う志^しする
茶^{ちや}とて試^しけ^け茶^{ちや}ふ^ふ九^く病^{びやう}わ^わ事^じのそ^そ病^{びやう}し^し然^{しか}る^るの
根^ね源^{げん}とて蘇^そ一^{いつ}菴^{あん}種^{しゆ}のふ^ふけ^け方^{かた}は^はむ^むとて治^{ちや}ひ
書^{しょ}より出^いたり然^{しか}る^るとて昔^{むかし}書^かけ^け茶^{ちや}の法^{ほふ}書^{しょ}とて名^な菴
とて我^{われ}家^けに遺^い書^{しょ}とて長^{なが}化^けの今^{いま}滿^{まん}とてあ^あふ
とて書^かる^るとて必^{かなら}ず^ずとていふ

慶應元年 壬午五月

清水隱

義郡

信史郡泉村佐藤貞藏歌

青い蚕 習安 昔々

徳れもよきか

葉とおしあ

子同とおしあ

養蚕物語 目録

- 一 かい蚕 中 白 海 長 屋 事
- 一 蚕 種 あり 四方 白 海 の 事
- 一 蚕 種 取 扱 い 拾 白 海 の 事
- 一 蚕 屋 陽 射 取 蚕 棚 出 産 事
- 一 蚕 種 あり 名 掃 之 様 白 海 の 事
- 一 毛 蚕 取 扱 い 拾 列 石 大 切 の 事
- 一 獅子 蚕 取 扱 い 白 海 の 事

- 一 麴たか蚕こ取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 舟ふね蚕こ取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 庭かみ蚕こ取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 心こころ一ひと根ね白しろ得との事 取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 陽やう氣き取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 香か小せう病びやう一ひと根ね白しろ得との事 取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 傍たは蚕こ取と扱とひひ根ね白しろ得との事 取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 糸いとの事 取と扱とひひ根ね白しろ得との事
- 一 蚕こ中ちゆう葉え取と扱とひひ根ね白しろ得との事

目録終

茶の茶物語

茶の茶中一白濁なる事

○ 茶を飲めばあまを長しひき雲の人の業に
 して心も事も何の世の流るる縁に
 ち氏の石の事とてあまの望と別神のむす
 して高き神の我家の天路なる心白濁
 火を清く事法神なく茶を茶末小取扱ふ
 茶扱ふの目も家内むす諸事まをる
 茶と神神世と白濁常おもを流るる

桐子屋

○世の人の物語と聞かば運と運のむしとて運乃
つよき人といふも運とても遠く運の思ひも人の
心介へ存念をさそへとも大遠ぶるもいふ人
しと人なる運はなるが運も運事なれけし
春取振うことゆゑか知ぬ俗人念女のためを
勘多し人小春養ひかへこの物語もすゝ馬猫
よ経文と流すせとて是のまゝもかへしとて聞
しとてしし何のさうれん春と何れ運の念思ふ

○抱んや天地自然の陽もふあつとて去も死の相
つるも念と考ひ糸の掛へ取振ひし切者
幅と作れぬいふとてさうも切者か知し
年遠くもいふとて事も事とて然もも徒
十の春とともいふ事いふ事とていふや
なれい若き時時候も実候時の變りて
是と人かたも取返す事けししし寒候時
も初め切者もいふ取振をいふも何れも
いふ事もいふ候も毎年十分の運と運もいふ

一寒暖は取扱の法未だよく知らず

○ 春の養生の法は、冬よりもおもしろい。春は、

けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

○ 養生中、春の養生の法は、冬よりもおもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

○ 蚕の養生の法は、冬よりもおもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

春は、けいも、おもしろい。春は、けいも、おもしろい。

と都らるるをく志し徳家虎らの書よればし
初めありきし試し神平外の定を書
し

○先格授包に〜種梅の包〜種〜脚
〜行義回〜産有るを〜種ととも也王次
はあふんももの〜布帛がてんを中上は高
馬ふ〜貫た〜4包ふけゆ種い悉〜悪種を
種〜ろ〜くもむ〜り〜〜事ふん
行義回〜〜種いげ〜〜り〜〜林

○んも〜種り〜〜〜種々湯面
の蚕〜百〜種〜種〜い〜行も〜を〜〜大
十の種〜〜〜又油種包〜〜
んく白粒交〜〜い〜種〜蚕糸体の高
温糸面〜〜〜の〜長糸の幅〜〜
る種〜〜〜た〜
上種〜麦の〜粒〜種〜包〜枯風の〜
い自然〜粒肥〜〜〜〜
肥〜枯風の〜粒〜包〜の〜透〜

種と鬼と勿一 一 足元の故この如くは度々
種と人とも由らある種

○ 右のりくく 善くは有るも昔種も向く
人知事 故 故年の切みよりの如く
す 相持種取人 小縁と 一よりして種の各態を
習いし知る由事

蚕種取扱ひは白澤の事

○ 蚕種と名くは五くは西風の吹通る産火の
季のどくぬき押の遠く糸を後種とほり出せ

伴 決汀のふ柳の事 雲 鉄の毒物種ふ
隣りし上

○ 右種とほりるをさる下小房の事 一人の夜
息種 魚の産物の隣りし

○ 右種の下小幅端の事 又右の境と向く今
酒宴とともしひ魚の事

○ 櫻のけ糸の事 春種とともしはく物事より
し 種紙 構とともし若くはく 蚕種とれ
帝 隣りし上

○九月末より十月の初めまで紙袋に入つておし

実中より種箱の中はあつた

○當代より種箱より取付いたる者も稀なれ紙不

包も長持たしたるの内には稀なるとも重丹のうら

ぬ所より入るる引かへ入るる志し種も約ふ

陽より夜雲むし陰のそめ樟脳も入るる

ふりふり香煙と入るる事なれ是れ愛する種又

長持もも座の方へ入るるは海軍有り心儀林

入るる事の列は海軍の考へずし

○香煙と実中より水に印したるは是れ當代を四

つれいひては南軍より我ももて定むるの事

試も然とも徳賢院の書もも入るる種名

事なれ其の事とてさるる先實中此印の

目より入るる清文流も川より入るる清流

川の事なりは清和御年のたも活潑の水桶

も清文を定中印の日の朝也し種名も入

水の氷も入るる毎日水を汲むる二日一夜

也しはる日午の日照の内反上は地也し日

表や〜種〜の方より乾く迄〜糸のた〜糸
小糸の糸は内糸を長く火の進〜糸を水
らぬ糸を〜乾く迄〜糸は〜糸は〜糸は
糸程の進〜糸は〜糸は〜糸は〜

蚕屋陽氣百蚕棚糸糸事

當糸〜蚕屋〜列〜糸は〜糸は〜糸は
の回又〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
たれ〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜

後中は切長棒の〜の〜後〜糸は〜糸は
糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は

六五敷八五敷の〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
の〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は
〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は〜糸は

いろきい
 席より左の間や〜おきふも昔の滑車を寄せる座
 ありと暖炉より〜登初座暖〜湯を〜湯を飯
 として昔も煮られい方巾着や〜ひつち〜舟に
 席より左の間や〜暖炉〜湯を飯と事〜津
 由事〜〜焚火炭火〜不折〜〜席を〜席
 して席を拂ふ〜
 〇て井板のは漏れぬ〜し〜席も〜座敷の
 箱の〜に〜〜籠の〜高〜登湯〜と
 と〜
 〇

〇蚕屋の内〜夜風〜雨風松のり〜吹る風の
 春ふ〜雪〜蚕屋は出入も用ふ〜と〜
 風と今〜糸を拂〜〜の陽射あり〜
 糸と〜
 〇

〇蚕屋に塘と印〜も〜焚火と〜れ〜生糸を
 い〜〜湯り〜〜〜蚕出〜
 斗〜十日の〜塘と印〜湯り〜の〜
 〇

〇蚕屋塘〜の籠〜〜〜塘糸〜
 〇

き
きも花の行れいよも行く病の春を成るを
南風又も空を曇るのり煙籠るわす
とのまを排す
但南の方のり
南風と春と
大毒する南風吹く春の火を
と先南風の元清よぬ
家もくも雲子
透回の
風も入る松も
水口の仕切のり
心もとく南風居し風を火も前
陽の陽子の競ひ
大愛のり
去の候ふ
月もろくえはも自然
庭春

○ 小至く候く大毒成る
小風や雨降つて流る多き候
水口と雲を
南の元々明ふ及ば
流る候ふ
小風の流る南風の流る
候く
油のり
春の肉冷
冷く候く
油のり
湯分取遠く事あり
油のり
毎日晴天お清く候く
春の肉冷
春の乾く日

○ 小至く候く大毒成る
小風や雨降つて流る多き候
水口と雲を
南の元々明ふ及ば
流る候ふ
小風の流る南風の流る
候く
油のり
春の肉冷
冷く候く
油のり
湯分取遠く事あり
油のり
毎日晴天お清く候く
春の肉冷
春の乾く日

わく乾く日あり雨こしとよも木のこころ日あり
葉の無門も春中と乾く一葉のあはれ

春陽のあはれとよも骨と根中と根のこ
しは陽のあはれ朝と夕の差別あり是を
ひたす一葉のあはれ

春陽の三候も春の内の格別暖うなる火
と根中と根のあはれとよも骨と根のこ
も知れ鶏卵の注目とよも根のあはれ
とよも骨と根のあはれとよも骨と根のこ

まじりたる火と根のあはれとよも骨と根のこ
物より物とよも骨と根のあはれ

春の内の格別暖うなる火と根のあはれ
一日一葉は春のあはれとよも骨と根のこ
是を定例とよも骨と根のあはれとよも骨と根のこ
とよも骨と根のあはれとよも骨と根のこ
も乾く日ありとよも骨と根のあはれとよも骨と根のこ

○ 春の内の格別暖うなる火と根のあはれとよも骨と根のこ
とよも骨と根のあはれとよも骨と根のこ

とく先〜るる〜能知〜する

○ 蚕棚と重屋の月半の暖う成る布と〜素

と撥ふ山女〜と〜子蚕糸体の節も〜

と〜たら末と〜知〜棚布の間と〜すも

と〜ふ糸角〜棚布の間と〜交蚕〜

て〜

○ 蚕屋の焚火と糸の枯れおぼ〜

と〜に和〜ぬる〜保蚕屋〜あり〜

あ〜変〜〜あり〜

○ 婦人月乃降〜と常〜し病の介〜

血病と〜し〜家女〜熱と〜人あり風邪〜

病しと〜し〜人里女〜

陽糸角〜る遠〜事あり〜酒〜

と〜人〜必〜

○ 雨乃降ぬ水海〜と〜

蚕屋の火と〜人〜

と〜と〜毛蚕扱ひの肉蚕下〜

時の事〜と〜雨〜

唐を重くしるる春下も乾ぬよのりぬきり火を焚
けと却る湯糸湯の刻一たてい威も湯
ど湯力けあつあつと火も高れと却る湯糸湯の
りこー 能る魚 味ふー 舟重延茶
即しては活文火と云用する毛巻糖を重しと
とも南東各色凡の雨もと火の遠魚と一

至種まきせぬ系揚まぬ白濁の支

○ 當りて春霜度と降りて茶の芽を甚おとす
○ 一重種まきせぬ系揚まぬ白濁の支

冬中しき色おし 樵をふ入部をふふも種
まきけり 油のまき入物の用やまき
有る度刻る巻たよりー 是去年の時よー 茶の根
おとさるし入物をし 自然の湯糸とて産を
おとす

○ 至種まき入物より取出 種成以上と下を茶を
火気のまき入物の遠くまきかも一目あつ

と下と御形

○ 茶の芽出ー 重種まきせぬ系揚まぬ白濁の支

○ 至極まで行かぬ余りか、然るに成るべくして、その天の
 陽をことごとく包み、あたふたに在り、先朝の尊く、
 の内、小届風と立、此際より、一、た、後、清く、至極まで
 づ、種、表と、清子のま、向く、この陽を、清く、
 極、ゆる、秋、と、春、心、いつ、あ、その、同、古、存、も、成
 ひ、い、忽、ら、至、極、成、り、ゆ、り、
 ま、ま、存、る、極、と、し、の、一、世、と、極、成、る、ま、ま、
 入、物、は、は、是、れ、い、つ、ま、七、藏、と、極、成、る、ま、ま、
 為、す、至、極、と、成、り、一、白、得、成、成、る、ま、ま、

○ 至極まで行かぬ余りか、然るに成るべくして、その天の
 陽をことごとく包み、あたふたに在り、先朝の尊く、
 の内、小届風と立、此際より、一、た、後、清く、至極まで
 づ、種、表と、清子のま、向く、この陽を、清く、
 極、ゆる、秋、と、春、心、いつ、あ、その、同、古、存、も、成
 ひ、い、忽、ら、至、極、成、り、ゆ、り、
 ま、ま、存、る、極、と、し、の、一、世、と、極、成、る、ま、ま、
 入、物、は、は、是、れ、い、つ、ま、七、藏、と、極、成、る、ま、ま、
 為、す、至、極、と、成、り、一、白、得、成、成、る、ま、ま、

○ 至極まで行かぬ余りか、然るに成るべくして、その天の
 陽をことごとく包み、あたふたに在り、先朝の尊く、
 の内、小届風と立、此際より、一、た、後、清く、至極まで
 づ、種、表と、清子のま、向く、この陽を、清く、
 極、ゆる、秋、と、春、心、いつ、あ、その、同、古、存、も、成
 ひ、い、忽、ら、至、極、成、り、ゆ、り、
 ま、ま、存、る、極、と、し、の、一、世、と、極、成、る、ま、ま、
 入、物、は、は、是、れ、い、つ、ま、七、藏、と、極、成、る、ま、ま、
 為、す、至、極、と、成、り、一、白、得、成、成、る、ま、ま、

て桐もよ桐湯まつし中桐も下の方は桐も
しと糸角の掛ぬ桐もよ——保冷——と糸角
糸もよも昔も昔の湯もよ越ひ雨落もよ
て糸角もよと糸角もよと糸角もよ

○ 初穂小掃ありはも同作らばも紙より春下
乾き速——却——取扱ひ方より——と糸角

○ 掃之の席、春屋小掃もよ入る事、と糸角、春生
もよもよと糸角、凡徳、南、と糸角、と糸角

○ 掃之の目より二日の間春屋の湯もよ糸角の掛下糸
の乾き加減少く高き遠ひは糸角、と糸角、肝

○ 要乃目より春屋の門部もよ湯もよと糸角の春
振下糸角の乾きもよ——

○ 紙も掃ありは時小春屋紙もよ落もよれ、糸角、計
しと糸角、と糸角、と糸角、と糸角、と糸角

○ 糸角もよもよ初穂も掃ありは、と糸角、と糸角、と糸角
も掃ありは、と糸角、と糸角、と糸角、と糸角

○ 掃之の目より初穂と糸角、と糸角、と糸角、と糸角、と糸角
陽糸もよ、と糸角、と糸角、と糸角、と糸角、と糸角

毛蚕糸角の事

て番下乾子、安流るわつ、計的、は後葉を掛成り、
下掛の部番下は、水乃、す、志、か、く、成、る、計、的、を、お
あ、ふ、葉、を、掛、え、ら、ま、さ、う、乾、子、を、く、火、の、湯、に、お
又、番下乾子、く、水、乃、あ、る、内、ふ、葉、を、お、掛、と、い、葉、
幹、ふ、苗、く、く、ま、ま、く、あ、る、中、外、乾、子、番下、い、ま、く、
か、く、極、小、湯、乃、を、ま、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、
せ、ぬ、木、乃、あ、る、く、湯、乃、あ、る、小、内、湯、と、碎、く、ま、ま、し、
○ 番下乾子、く、く、ま、ま、く、あ、る、中、外、乾、子、く、く、ま、ま、
あ、る、内、湯、乃、あ、る、の、掛、り、右、切、り、水、乃、角、初、心、の、内、湯、
乃、く、小、苗、の、掛、く、番下、の、乾、加、減、を、ん、ら、う、掛、り、
て、番下、腐、り、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、
○ 本日、冷、り、る、く、又、も、湯、乃、に、お、か、番下、此、乾、子、
目、乃、の、掛、り、揚、げ、火、を、ま、く、角、角、電、を、葉、
く、湯、乃、に、お、か、く、葉、を、か、く、く、く、
葉、も、じ、く、く、切、り、掛、り、細、く、た、く、く、
葉、を、か、く、く、掛、り、く、く、
○ 葉、の、成、り、を、あ、る、中、に、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、
掛、り、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、中、の、乾、あ、る、く、あ、る、

て番下乾子、安流るわつ、計的、は後葉を掛成り、
下掛の部番下は、水乃、す、志、か、く、成、る、計、的、を、お
あ、ふ、葉、を、掛、え、ら、ま、さ、う、乾、子、を、く、火、の、湯、に、お
又、番下乾子、く、水、乃、あ、る、内、ふ、葉、を、お、掛、と、い、葉、
幹、ふ、苗、く、く、ま、ま、く、あ、る、中、外、乾、子、番下、い、ま、く、
か、く、極、小、湯、乃、を、ま、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、
せ、ぬ、木、乃、あ、る、く、湯、乃、あ、る、小、内、湯、と、碎、く、ま、ま、し、
○ 番下乾子、く、く、ま、ま、く、あ、る、中、外、乾、子、く、く、ま、ま、
あ、る、内、湯、乃、あ、る、の、掛、り、右、切、り、水、乃、角、初、心、の、内、湯、
乃、く、小、苗、の、掛、く、番下、の、乾、加、減、を、ん、ら、う、掛、り、
て、番下、腐、り、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、
○ 本日、冷、り、る、く、又、も、湯、乃、に、お、か、番下、此、乾、子、
目、乃、の、掛、り、揚、げ、火、を、ま、く、角、角、電、を、葉、
く、湯、乃、に、お、か、く、葉、を、か、く、く、く、
葉、も、じ、く、く、切、り、掛、り、細、く、た、く、く、
葉、を、か、く、く、掛、り、く、く、
○ 葉、の、成、り、を、あ、る、中、に、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、
掛、り、く、く、あ、る、内、湯、乃、を、ま、く、中、の、乾、あ、る、く、あ、る、

ひねり

○二日目 陰分かげんにて茶ちやはな定例ていれいとして茶ちやの中なかの茶ちや

下の乾加減かんかへんとして一いっ交こうううけけ一いっ倍ばいとして早はやの湯ゆに茶

少すく茶ちやはな一いっ茶ちやとして茶ちやとして茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

雨あめをふくく切き之の茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

○三日目 茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

△鶴つる茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

野の村むら徳とく家けのの茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

○四日目 朝あさ茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな茶ちやはな

たけのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ
きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ
きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ
きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ → きのこ

○ 五日晴天晴まけの葉をいりて煮たりの茶を
かきとる茶をいりて煮たりの茶を
の茶をいりて煮たりの茶を
肝要なり

○ 五日目の採りけつ國新の葉をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を

○ 五日目の採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を

○ 七日八日採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を
採りて煮たりの茶をいりて煮たりの茶を

△ 茶葉採り
晴天の時の採りて煮たりの茶を

○ 葉休の同定くは暑くは「寒」Shime「厚」Shi子をぬけ「葉」の
影かげぬけは「く」く無^ゆた^たを敷るふさう「風の透^すけぬ
りけ」り「ま」ま「あ^あの^のも^も上^上下^下入^入替^替事^事」事「あ^あな^ななり
○ 叶休^{あき}「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき

○ 叶休の同定くは暑くは「寒」Shime「厚」Shi子をぬけ「葉」の
影かげぬけは「く」く無^ゆた^たを敷るふさう「風の透^すけぬ
りけ」り「ま」ま「あ^あの^のも^も上^上下^下入^入替^替事^事」事「あ^あな^ななり
○ 叶休^{あき}「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき

○ 無^ゆた^たを敷るふさう「風の透^すけぬ
りけ」り「ま」ま「あ^あの^のも^も上^上下^下入^入替^替事^事」事「あ^あな^ななり
○ 叶休^{あき}「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき
「あ^あき^き」あき「あ^あき^き」あき

○ 九日十日は「大^{たい}体^{たい}紀^き」き「大^{たい}体^{たい}紀^き」き

○ 九日十日は「大^{たい}体^{たい}紀^き」き「大^{たい}体^{たい}紀^き」き

臘蚕ぬき巻くぬき

○ 庭より舟の以い若舟小向ふ所を着着舟の船より

糸舟より一々垂下かきさるる春の洞ひなを記

しつものしつと里赤紀とある物色いりり

くしん

○ 雨色水清きて色よりこれの色あり花の赤紀

垂るぬき一巻巻巻記より舟の船ひねりて又

南風舟色はれちるぬき一水舟の船より又記

大船中へいりて竹籠の籠毛と知る一備文

取扱ひわりのしつと事りたるもの

庭より舟糸舟中南風温暑清秋

○ 庭より舟糸舟中雷記より大若とて竹籠の籠毛

しつと陽まはる家の船より花舟と記す

南風舟を切つて西より水舟を記す

竹籠の籠毛よりしつと舟籠小松舟

より日産舟より一極板の水舟糸舟を記す

庭角舟の透板舟より事守りの舟籠

○ 同 雨色水清き花

○ 蚕のしめに晴を少く桑はよふに俄の雨ぬくても
日の清澄き山風ぬくてもし蚕は縛に
わづかのほろけを桑に下りぬくても桑は濃毒に
脅うたう海く桑の木の事わづかのほろけを
蚕屋とわづかに暖ふ桑のたも置よし蚕は濃毒を
入地よりいへて蚕下りぬくても桑は濃毒を
いと桑をいへて桑は濃毒を濃毒の海に圍ふを
棚の中へおろしつと桑をいへて桑は濃毒を
随ふげのいへて桑をいへて桑は濃毒を

背いぬくては記しを桑は濃毒を

△ 従ふまゝに入らぬ桑のいへて桑は濃毒を
蚕のしめに記しを桑は濃毒を

○ 死蚕あり〜やえぬゆゑ的箇桑を掛け晴雨寒暖
取扱ひおふりかた〜蚕八九分通つ死をいへ桑は
さつと掛けを桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を
桑を〜桑をいへて桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を
桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を桑は濃毒を

○ 庭蚕の記扱女のいへて桑は濃毒を桑は濃毒を

らに改を多し下て切長く細くして改を
とちり甘月一信や一響ひえゆをよとん

色赤く厚悪く厚細改吉く切合纏くぢらくや
して起るる細りく一又吉印小記たもほりる目ふ
膿養くぬるるあ一能くたえとん

細くや一響ひりく一延く一帯巻くあや
色白くもくぬる養く一舌病の上をくい養く細
蚕の時陽子の色作らあ悪く一火も痛けをよとん
庭起く一老るもくあまじの底くる事な一蚕の

属乃音起をらめの色あきくあきく一老る
能くたえとん

○ 河月朝葉と山掛葉小食あ一虫小蚕下をよ
る一舌と養く一痛ひのら養をけりあ作
養をけく起りけあ一蚕朝養くぬるは一織小
出もあわ一知養く一毒葉ある糸のわくこれあはる
い目々葉葉の事あ山掛葉一大量あけ
葉小水く一ち掛るる蚕の畀小園の河あ
畀小雷あの方畀く一も葉をかけ

凌あつくあつらあつりあつのあつ隙あつをあつ尋あつねあつれあつ、葉あつをあつ絶あつてあつ、
 さらあつにあつ梅あつ花あつをあつ枝あつ葉あつをあつけあつてあつ凌あつぐあつ、
 夕あつ葉あつをあつ余あつりあつにあつ葉あつ掛あつてあつ、
 葉あつをあつ掛あつるあつにあつ棚あつの下あつ
 へあつとあつ入あつりあつてあつ、

○ 蚕あつのあつ暑あつ小あつ節あつのあつ葉あつをあつ八あつのあつ時あつのあつ雨あつのあつ時あつにあつ格あつ別あつのあつ備あつをあつ、
 夕あつ葉あつをあつ中あつにあつ掛あつけあつ、
 梅あつ花あつをあつ枝あつ葉あつをあつけあつてあつ凌あつぐあつ、
 時あつのあつ反あつ好あつひあつこあつのあつ雨あつのあつ時あつにあつ格あつ別あつのあつ備あつをあつ、

とらる事ありけれ

○ 蚕あつ葉あつをあつ食あつひあつ切あつてあつ、
 蚕あつ葉あつをあつ食あつひあつ切あつてあつ、
 蚕あつ葉あつをあつ食あつひあつ切あつてあつ、
 蚕あつ葉あつをあつ食あつひあつ切あつてあつ、

○ 庭あつ蚕あつのあつ月あつのあつ頃あつにあつ、
 庭あつ蚕あつのあつ月あつのあつ頃あつにあつ、
 庭あつ蚕あつのあつ月あつのあつ頃あつにあつ、

荷をよき俵にする

○

養子わいご一いっきも一いっふすゝ老るいらを拾ひろてとる養やう子こと
ととよよいい桶ぶく作しられしきふいののててりけては
おおももつつ俵はたけののききををしし

○

灰かいししららるる養やう子こととぬぬるる野の山さん今いまももああるる
ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるるののつつりりて

○

同どう体たいくくちちししのの入いりりははいいののああままのの桶ぶく
一いったたいい山さん今いまのの桶ぶくひひききををししききををししるる
層そう々ささ入いるるののああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる

○

同どう女にょののああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
折あじじととななるる中ちゆうののああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
たたのの桶ぶくののああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる

○

ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる

○

ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる
ああままのの桶ぶくひひききををししききををししるる

火を焚くはくして為印を免けて幅細く糸を引
多の糸を引るは我よりたのむ糸を引るは
極大糸の御糸を焚くは糸を引るは

○ 為印の糸を焚くはくして種取の場を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは

○ 小糸を引るはくして大糸の糸を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは

魚—— 魚の糸を引るは火を焚くは糸を引るは

蚕の糸を引るは根原と糸を引るは

○ け蚕糸は病あり糸を引るは徳寶院の糸を引るは

△ 種糸—— 糸を引るは糸を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは
糸を引るは糸を引るは糸を引るは

△ 細糸

乃時火の園に糸を引るは細糸を引るは

△ 蚕揚立く 素掛宿り切るか 蚕巾の乾ぬに汲

けけ湯敷と注ぎ ときたまぬき 桑は山わけ 急不暖ふく 蚕巾の痛ゆ 湯の又 湯ぬい不用り 併の半し 俄に 火の固く 桑の痛ゆ

又桑の痛ゆ 火の固く 桑の痛ゆ

△ 赤起蚕

△ 赤起蚕 蚕を赤く起し 湯をぬき 桑を赤く起し 湯をぬき 桑を赤く起し 湯をぬき

△ 起縮蚕

桑乃を起しわたり 桑を赤く起し 湯をぬき 桑を赤く起し 湯をぬき

△ 腐蚕

△ 腐蚕 桑を腐かし 湯をぬき 桑を腐かし 湯をぬき

△ 蚕頭透

△ 蚕頭透 桑を透かし 湯をぬき 桑を透かし 湯をぬき

轉蚕

△南風の吹入もかきこえて、水口の元もゆげが暑か
し、少く蚕を籠るべき。蚕下の毒が、小節々、即ち
小出する。いさ、庭蚕、成る、天井板の、
ま、に、数多の、玉、
切、
也、
也、

蚕足早

△蚕下のかさ事、
又、
終、
也、

節蚕

△是も、
南、
下、
也、

舍利蚕

△蚕、
徳、
も、
ら、

△し、
糸、
蚕、
也、

倭蚕小蠶と作

○倭蚕、
く、
是、
也、

春の暁の——さきゆく 春と啼ふをいひ 取巻のよき
水もい—— 入位の懐の中まぬを折しけり
春を入位のはとと春の出もぬ松や々 懐のよき折しけり
下より大と持ちけり 懐の中まぬを折しけり
春と——あていも他どきま 懐の中まぬを折しけり
我年外を光しけり 懐の中まぬを折しけり

春乃若思と知る事

○ 山葉々 春下乾まて—— 春の懐いよまて 春の懐いよまて
あまふはなたり。志く 春の懐いよまて 春の懐いよまて

○ さくらさくら 春を新あわ—— 春の懐いよまて 春の懐いよまて

春——とくたけ 春の懐いよまて 春の懐いよまて

○ 春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて

春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて
春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて
春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて
春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて
春の懐いよまて 春の懐いよまて 春の懐いよまて

蚕中禁物の支

家内不和

不和

油

慢心

懈怠

蚕屋
禁物

石

油

塩

切草

煙草

草

酒の類

ぬす物と干し草

味骨を焼く

推草を焼く

臭を焼く 交合

石を焼く

○ 焚火材料

炊橋桐

草

草

焚火材料

右の如き事

終

彼是と云ふ事

此の如きの事

慶應元七年

閏五月

佐久間義隆



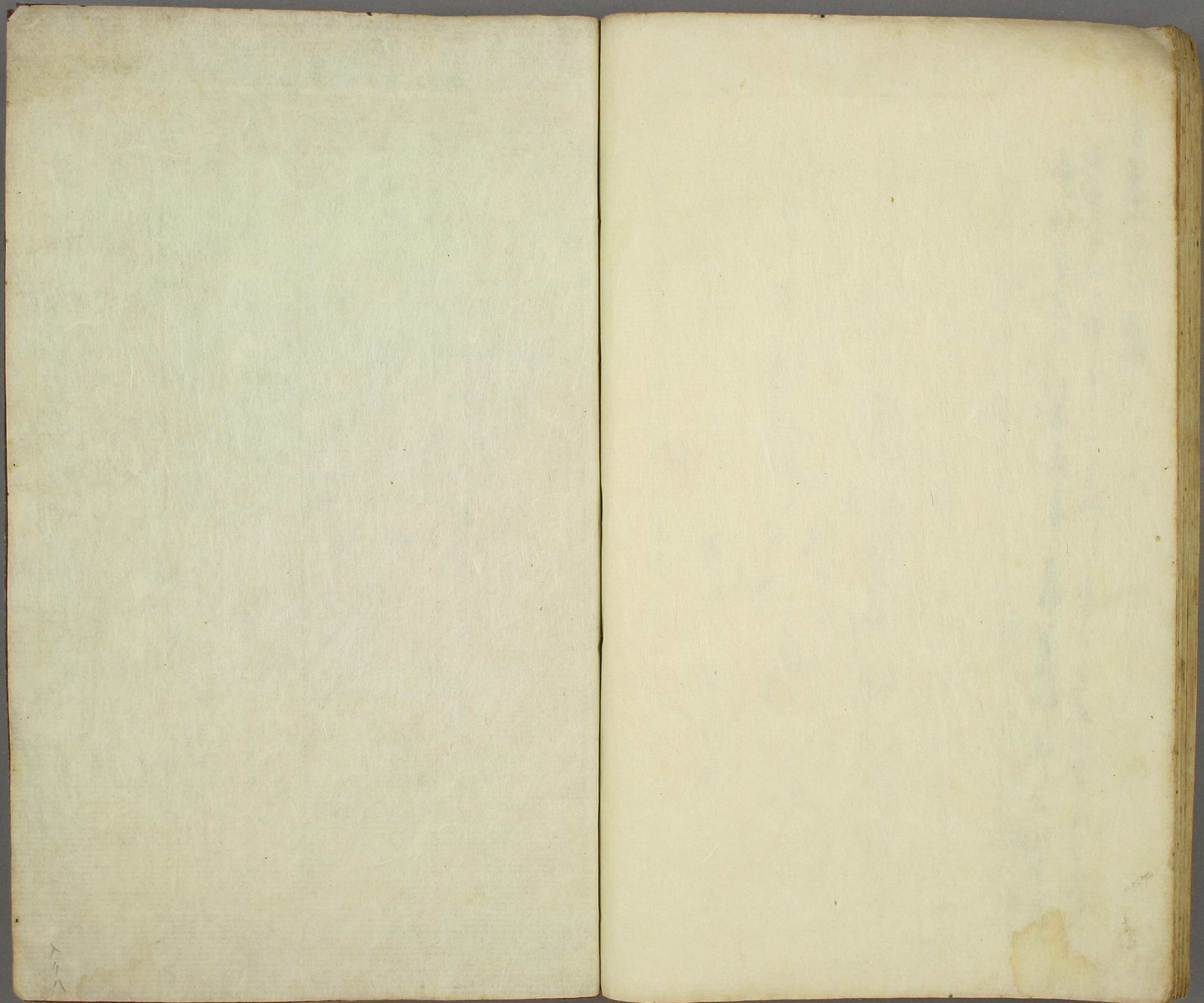
之七 常世の人と物持

能登のまゝを他へて中好しと存し、いふ事立はむかひもたの
所、かゝる事いふに、所を兼いたる、すも他へて、云、
一、何處へ登脚の
歌、海、化

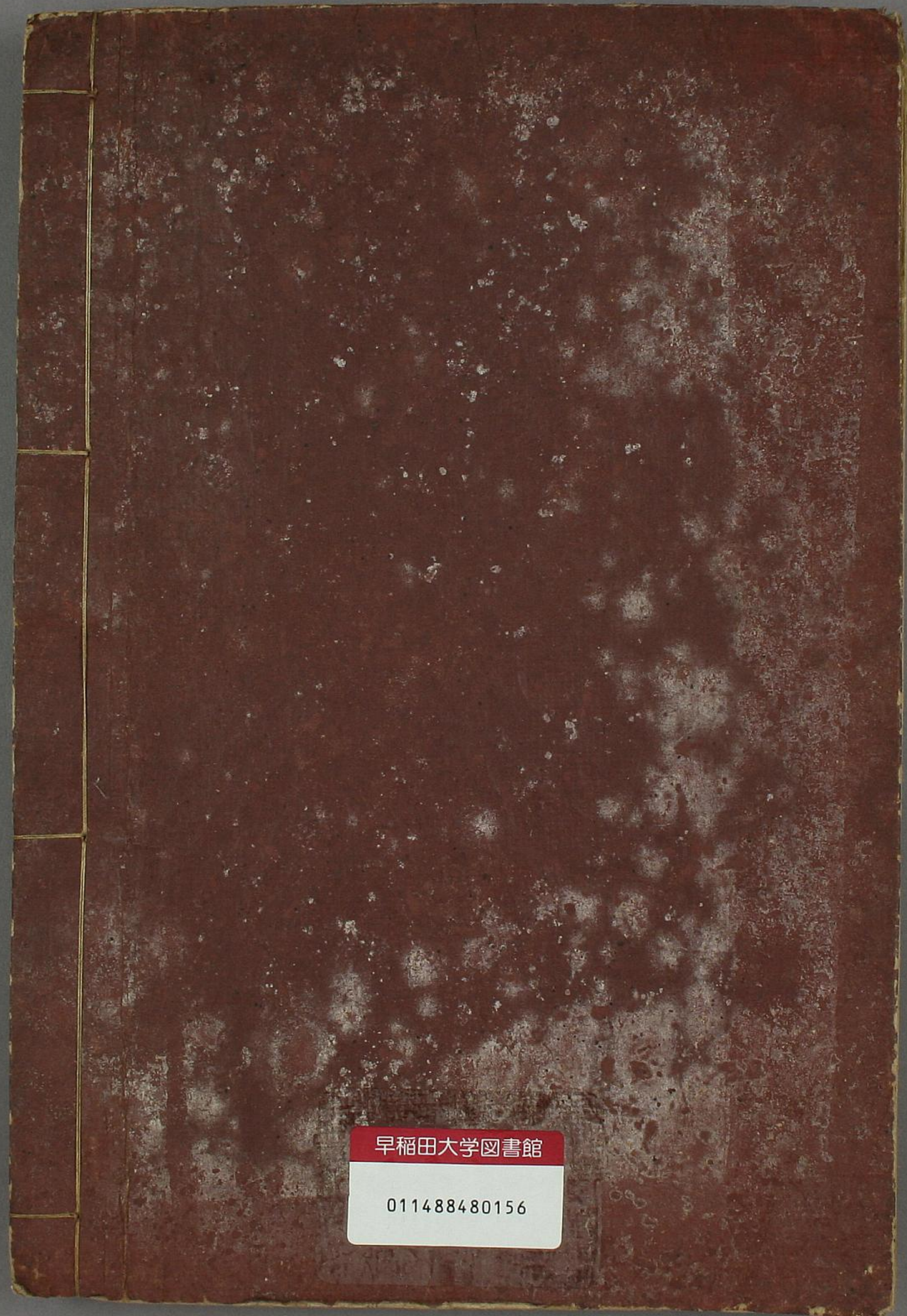
能登のまゝを他へて中好しと存し、いふ事立はむかひもたの

所、かゝる事いふに、所を兼いたる、すも他へて、云、

一、何處へ登脚の
歌、海、化



八
八
八



早稲田大学図書館

011488480156